

# ドイツにおける近代的大学の成立

——ベルリン大学をめぐって——

河野 眞

〈国際コミュニケーション学部教授〉

## はじめに

大学の歴史とそれを理解することの特異性：個々の事物や団体の歴史（産業や個別企業の歴史、事物の歴史など）とは違った難しさがあるのは、社会の一部門であると共に、常に学問論・知識論がからむことにある。組織編成や立地や建物の経緯をたどっても、大学の歴史にはならないが、学問論に偏り過ぎると、過去の大学と現実の差異を見落とすことになりかねない。学問論には、社会的背景への視点を組みあわせることが必要であろう。

また大学という名称が継続してきたことと、他方で、歴史的にも現在の様相においても大学と呼ばれるものが多様であることも考慮する必要がある。すなわち過去の大学と現在の大学のあいだには、連続性と非連続性があることを念頭におく方がよいであろう。

## ベルリン大学の成立

1810年にベルリン大学が設立されたことを以って、世界の大学の歴史の大きな節目とするのは一般的な見方であるが、なぜその前後に作られた他の大学ではなく、ベルリン大学がそれだけ注目されるのであろうか。それは、ベルリン大学の設立をめぐっては、市民社会において大学とは何かという深刻な議論がなされ、現実には多少割り引いたところがあるにせよ、その議論の現実化だっ

たからである。またその議論は、その後、各国の大学作りに大きな影響をあたえた。それは、東京帝国大学の設立にも影響したところがあるほどである。

## 設立時点の状況

——ベルリン大学は近代大学のモデルとされた

1810年10月開学（但し前年夏に国王の認可を得て1809/10年の冬学期が開始されていたので、特に公式行事はなかった）

設立の重要な推進者：ヴィルヘルム・フォン・フムボルト（Wilhelm von Humboldt 1767-1835 Department des Kultus- und öffentlichen Unterrichtsの初代局長であった）

開学時の構成

- ・教授陣58人
- ・学生256人（内、自プロイセン出身者152人）
- ・4学部構成：神学部、法学部、医学部、哲学部（他の3学部と同格）

趣旨：

- ・学問の批判的研究と教授することを2つの柱とする自治的共同体
  - cf. 教授することが趣旨となったのは、学問原理は教授することが可能か、という議論があったことと関係している。
- ・研究・教授を自主・自立的に遂行するための「大学の自由」（出版の権利を含む）／学生の学習の自由と転学の自由（領邦大学ではなくドイ

ツ全土的・国民的大学)

但し、教授の人選権は国家が有した（大学が獲得するのは1838年以降）

研究・教授への国家の介入の排除は2段階を擁した（1848年と1866年）

## 前 史

cf. 中世以来の大学の基本となってきた4学部構成

○学藝学部（下級学部）：七学藝（7種類の教養科目）教授はマギスター

初級3科目：文法、修辞学、論理学

学生は14、5歳から4年間でバ  
チュラー

上級4科目：数学、幾何、音楽、天文学

続いて4年間でマギスター

○3 専門学部（上級学部）：神学、法学、医学  
（独）教授はドクター

ドクターまでは6年から10年

（話題）後世「新しい学のあり方」（『新学問原理』）の定礎者と評価されることになるジャンバッティスタ・ヴィーコ（Giambattista Vico 1668-1744）はナポリ大学の修辞学の教授で、法学部の教授への昇格を望みつづけたが果たさなかった（願望の背景として、給料に大きな格差があった）。

中世の終焉を画するのは宗教改革であるが、宗教改革者マルティーン・ルターは大学のあり方を変革したことにしても特筆すべき存在で、その改革になるヴィッテンベルク大学は多くの大学の模範となった。

・ローマ教皇とローマ・カトリック教会の影響からの脱却：ラテン語とスコラ学を中心とすることを止め、聖書研究から、聖書の原典の言語であるヘブライ語・ギリシア語・ラテン語を重視した。言語の種類が、すでに中世的な権威を排した自由な研究を意味していた。

・それは、教皇の権威から、絶対領邦国家の確立

の時代に照応していた（ルターの場合はヴィッテンベルク大学の設立者たるザクセン選帝侯による絶対主義的領邦国家の強化）。同じ動きは、カトリック教会圏や司教領国においても推進され、大学は領邦国家の精神的な砦となると共に、そのための人材をも育成した。

・しかし領邦国家との結びつきは、やがて因習化し沈滞していった。

これに対して、17、18世紀前半には、学術・学藝の刷新活動は、むしろ大学の外で生み出された。すなわち、当初は学者の私的団体であったアカデミーであり、またそれはやがて領邦国家を超えるものである国家の支援を受けた（やや特殊例ながら、国語アカデミーからフランス・アカデミーが成立した）。

18世紀後半から大学は硬直化の度合いがつまり、近代国家時代に有為であるような施設ではなくなっていった。そして、大学の存廃と意義をめぐって異なった見解が呈され、論議される時代になった。

## 大学のあり方をめぐる議論

因襲化し、学知の機関としては意義が低下した大学をめぐって、3つの選択肢が論議された。

1. 大学という機関自体が時代遅れであることから、より歴史が新しく情熱的な研究活動の拠点となっていたアカデミーに委ね、また市民社会にみあった実利的な職業専門教育施設を新設し、大学自体は廃止という啓蒙主義の官僚たちの考え方。
2. 同じ観点を、大学の徹底した改革によって達成すべしとの考え方。
3. 時代にみあった知のあり方を見極め、それにそった構成に大学を変革すべしとする、新人文主義・ドイツ観念論哲学者たちの意見——結果は、この方向が実現して、ベルリン大学が創られた。

1792年の段階ではドイツ語圏の大学は42校（う

ち、今日のドイツ地域は37校)。

それ以後ベルリン大学の創設までの18年間に、ドイツ諸国の敗戦・ナポレオン＝フランスによる占領の期間に今日のドイツ地域では13の大学が廃止された。

## 大学論に哲学者たちの議論から

フムボルト (Wilhelm von Humboldt 1767-1835) : 学問の未完結性、学問は人格の陶冶でもある。

「高等学問機関の特徴は、常に、学問を未だ完全には解決されていない問題として取り扱い、従って常に研究中であるところにある。それに対して学校は、完成した解決済みの知識にのみかわり、それを学ぶのである。それゆえ教師と学生との関係は、これまでのものとは全く異なることとなる。教師は学生のために存在するのではなく、教師も学生も学問のために存在するのである。」 「高等学問機関の内部組織においては、一切は、学問を未だ完全には発見されておらず、また決して完全には発見し尽されるものではないと考え、不断に学問を学問として追及するという原則を堅持することにかかっている。」

シュライエルマッハー (Friedrich Schleiermacher 1768-1834) : (当時の大学の閉鎖性や限界を考慮した面があるが) 大学は学校の次の課程 (Nachschule) にしてアカデミー予備門 (Vorakademie) と考え、アカデミーには実学的学問の研究を、大学は純粋学を教授するものとした。これに対して、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte 1762-1814) : 従来の神学・法学・医学の3専門学部を解体し、その実用知の部分は他の適当な教育機関を設立してそれに委ね、残りすべてを哲学的エンチクロペディーの授業へ改革し、ただ一つ哲学部だけから成る大学を作るべきであるとした。そのエンチクロペディーはどのようなものとして考えられていたか。

「涵養された哲学的精神、すなわち知識の純粋

形式によって、今や学問的対象の全体が有機的統一において、高等教育機関 (= 大学) で把握され研究されねばならないであろう。そうすれば、何が学問的対象に属するか属さないかがはっきり了解され、学問と似非学問のあいだに厳密な境界が引かれるだろう。さらに、この対象の諸部分が内的に関連し合っていること、および相互的秩序のもとにあることが各側面から理解され、その点からしてその対象が学問機関において十分に扱われているか否かを評価できるようになるであろう。また各部分はどうな順序で、あるいは同時に扱うのが最も適切か、さらに下級学校はそれらをどの点まで教育するか、そして上級機関はどこから始めるのが適切かが分かり、さらに上級機関においては学問的能力者という称号に要請される一切のことがらを、どの点まで育成すべきかも、そしてそれに対して専門的実用的科目のための特殊教育にはどれだけの時間が必要で予定しておかねばならぬかが分かってくる。以上のことは、学問全体の哲学的エンチクロペディーが明らかにするのであり、それはすべての特殊な学問の活動のための不動の基準となるであろう。」

シェリング (Friedrich Wilhelm von Schelling 1775-1854) : 次のような構想を提示した。

「個々の専門のための特殊教育の前に、諸学の有機的全体の認識が先行しなければならない。一定の学問に貢献しようとする者は、その学問が全体のなかでどの位置を占めるのか、その学問に生命をあたえる精神は何か、またその学問を調和的構造と結びつける学問的方法は何か、を知らなければならない。したがってまた、その学問を奴隷のようではなく、自由人として全体的精神でもって考えるにはどのように対処すべきかを知らなければならない。」

ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770-1831) : シェリングは指針にとどまったが、それを具体的に提示したのはヘーゲルの『エンチクロペディア』(1818年)であった。

## プロイセン王国によるベルリン大学の設立の経緯

設立したのは、ドイツの有力国家であるプロイセン王国であった。プロイセン王国は当時ナポレオンに敗北し、ナポレオンの干渉を受けつつも国家の建て直しを急務としており、国家組織と社会制度の全般にわたって改革が課題となっていた。その一環として、高等教育機関の整備がめざされたが、それは期せずして当時の思想界の指導的な人々による本格的な議論に発展した。直接・間接に関係した人物としては、シェリング、フィヒテ、シュライアマッハー、ヘーゲル、ヴィルヘルム・フムボルトなどである。W.フムボルトは設立における行政の担当者であり、構想者でもあったために、ベルリン大学は、早くからフムボルト大学の通称を得てきた（東独下でそれが正式の名称となった）。

## 近代大学設立の前史と前夜

- ・当時も大学はかなり多数存在したが、それらと訣別したものであることが新大学には期待された。ヨーロッパの諸大学は、中世にまで遡る伝統をもつことによって高い評価を得ているが、その後の歴史のなかで大学は必ずしもポジティブな施設とばかりとは言えなかった。
- ・中世以後では特に宗教改革者マルティーン・ルター (Martin Luther 1483-1546) が制度・教育内容の改革をヴィッテンベルク大学で行ない、同大学は16世紀中ばから後半には諸大学も模範となった。しかし、その改革の成果も17世紀を通じて因習化していった。教授陣と学生団体からなるツンフト的な組織や、領邦国家（江戸時代の藩のようなもの）の統治に奉仕する人材の養成機関でもあり、地域主義の視野の狭さの一翼を担っていった。その点では、生産における封建的は手職団体（親方・徒弟制度）、種々の特権をもつ教会・修道院、同じく国家から相

対的に独立した特権・権益を擁する都市などとも通じる旧勢力・旧制度の一部であり、近代国家が本格的に確立されるには、見直すべき対象であった。

- ・見直しの要点 近代を規定するキーワードでは、

市民社会	}	に相応しい大学
民族（国民）国家		
国家（の時代）		

以上の3つのキーワードは、<sup>しばしば</sup> 同列に論じられるが、3者は微妙に異なるところがある。

ベルリン大学設立につながる大学論のなかでは、市民社会と国家の区分が大きな論点になった。たとえば、フィヒテは、市民社会とは利害団体・個人の集積であるのに対して、それを超越するものとして国家を位置付け、したがって、大学は市民社会のためのものではなく、国家のためのものでなければならないとした（哲学的大学の構想）  
→ エンチクロペディアの提唱

## 哲学部の成立

ベルリン大学の構成上の特色は、哲学部が、中世以来の上級専門部門である神学、法学、医学と同格とされたことにあった（哲学的大学という構想からは、折衷的であった）。

- ・設立に至る論議では、むしろ哲学部が大学の中核とする構想が新人文主義の哲学者たちによって提起された（次の3つの要点）。

自由な人格としての市民  
ギリシア・モデル  
理念的であること

- ・哲学部 従来の下級学部の役割はギムナジウムに譲り、学の体系的認識と学問研究の方法が核になった。
- ・学の体系的把握は、哲学部の教授内容として「エンチクロペディア」が提唱された。これ自体は、理念性の勝ったものであったが、大学が後に学知の総合性へと発展する芽となった。フィヒテ

によるエンチクロペディアの構想はヘーゲルによって教科書として実現した。

- ・また個別的には、言語学と歴史学（また両者との関連で後には地理学も）が重視されたことは、神学と法学を土台について批判の土台を作った。
- ・自然科学との関わりでは、哲学部には、直接的には医学の基礎部門という建て前を借りつつ、物理学、化学、生物学が導入された。

### ベルリン大学設立構想の一側面

#### ——実務ではなく理念（フランスとの対比）

フランスでは、フランス革命の後、人間が実務によって有為であることが重視され、それゆえ封建遺制の一新にあたっては、実務的専門教育機関の整備という観点からの施策が進められた。ドイツの議論はそれを視野に入れながら、敢えて違った道を選んだところがあるが、そこには両国の条件の違いがあったであろう。フランスでは大革命とナポレオンの執政下で、アンシャンレジームを支えた諸機構は壊滅させられ、代わって現実に照応した市民社会が前面に出てきていた。それに対して市民社会の未成熟なドイツでは、実務を重視することは前代からの遺制の温存に繋がりがねなかった。つまり、足が地についた実務論を行なう環境にはなかったとも言える。そのため、ドイツでの議論は、勢い思想性の勝ったものとなった。いわゆる観念論であるが、観念論とは空論のことではない。あるべき理念を設定し、その現実化を図る革新運動であった。見方によれば、理念から始める方が、事態が整理しやすかったのである。しかし、それは、社会的な諸勢力の抵抗を排して進める以上、それをなし得る唯一の力の所在たる国家と提携するものでなければ実現の見込みが立たないことを意味してもいた。つまり実務論から入ると、遅れた社会に引き戻される恐れがあった。またそれほどしぶとい社会の現実に変革をもたらすには、国家の高権に期待するしかなかった。こ

こに、ドイツの大学論は、高邁な理念から出発することと、国家の主導による理念の実現の二つを骨子とすることになった。それはまた、国家を、その中核的構成員（王室・官僚・軍隊）の実態よりもはるかに理想化したものとして描き出すことをも結果した。しかしまた、当時のプロイセン王国は、危機的状況を背景に、伝統的な指導層である世襲貴族も含めた支配者層が国家全般の改革に使命感をもち、進取有能を発揮した時代でもあった（シュタイン Karl Freiherr von und zum Stein 1757-1831、ハルデンベルク Karl August von Hardenberg 1750-1822などの政治家、シャルンホルスト Gerhard Johann David von Scharnhorst 1755-1813、グナイゼナウ August Gneisenau 1760-1831などの国軍の指導者、フムボルトなどの官僚）。

（理念）ベルリン大学に結実するドイツの大学論議は、以上のような社会的な構図のなかで、それに照応する形で展開した。

上記では、フランスとの違いを強調することになったが、土台となる基本的な状況ではイギリスもフランスもドイツも市民社会の進展が基本的状況という限りでは共通していた。したがって、差異と言っても、共通した土台の上での程度問題にすぎない。しかしまたその僅かな差異が、それぞれの方向において、そこに含まれる可能性を極限まで達成したのは、西洋文化の厚みである。それはともあれ、基本的な状況では、人間が自由な人格であることが原理となった時代であった。大学論においても出発点はこの人間観にあり、またそれはルネサンスに遡る。ルネサンスは人間を神の似姿とも写し絵ともみる視野を開いて近代を切り拓き、やがて啓蒙主義思想のなかで社会観や政治思想となっていった。

ドイツでは近代的な人間への目覚めは、社会制度の刷新（ジョン・ロック「市民政府論」）や社会原理への考察（ルソー「社会契約論」）よりも、先ず個人の成長という考え方と結びついた面があった。根底にあるのは、近代の人間である自由な存在としての人間であり、自由な人間が本然のも

のを完全に実現してゆくのが生育（Bildung 教養）である。生育はまた、それを人為による媒介（人為の性格には論者によって異なるが）から見ると、教育（Erziehung）である。それは、理念が自己を現実のものとする過程に他ならない。しかも、高等教育はその完成段階である。自由な人間がその可能性を完全に現実のものとする場所である。それは、人間社会がその可能性のすべてを展開し、究極の総合に到達するものとしての国家とパラレルでもある。あらゆる特殊性を総合するものである国家は、全体知が自己を全体知として実現したものであるが、それは道徳的側面においてである。それに対して、全体知の実現の認識的側面が大学である。およそ、かかる思考の脈絡において近代国家の大学としてベルリン大学は設立された。なお言い添えれば、国家とパラレルな関係に立つ全体知の担い手として一国家には一つの大学という主張もなされたが、これは言説にとどまった。しかしこれも含めて、そうした理想と高踏が大学のその後のあり方の長短両面に陰に陽に影響した。

## その後の推移から

### 哲学的大学の変質

ベルリン大学は、当初、ヘーゲルなどの思弁的

哲学や新人文主義の観点からの言語学が重視されたが、時代の趨勢は大学での自然科学の研究・教授を必要とするようになり、1860年前後から実験科学が導入されて、大学は大きく変化した。またそれが精神科学（人文科学）にも影響して、国家経済学（先鞭はチュービンゲン大学1817年、ミュンヘン大学1826年）などが定着した。また自然科学部の設立はチュービンゲン大学（1863年）が最初となった。

### 単科大学の成立（特に工科大学）

ドイツでは、ベルリン大学が哲学大学の構想によって成立し、それがモデルとしてはたらし、それが早くも伝統化したため、大学が応用科学や専門技術者の育成に関わることが難しかった。しかしそれらの部門は時代が求めるものであったため、19世紀後半には応用科学の分野で専門技術者の育成を目的とする単科大学が成立した。モデルになったのはパリの理工科学学校で、カールスルーエ（1865年）、ミュンヘン（1868年）、アーヘン（1870年）、ベルリン（1879年）など各地に工科大学が設立された（1910年までに11校）。

単科大学では商科大学（ライプツィヒ1898年が最初）、農学、林業・鉱山科なども設立された。

有力な総合大学であるフランクフルトは商学の単科大学から出発した点で特異な経歴をもつ。